

住まいの大阪学連続セミナー

世界の住まい・まちづくりセミナー2:カンボジア編

日時:2007年2月18日(日) 14:00~16:00

講師:寺川政司(都市計画プランナー)

I 開会

■講師紹介

司会:それでは、世界の住まい・まちづくり セミナー2 カンボジア編をはじめます。

まずはじめに、本日の講師、寺川先生のプロフィールをご紹介します。寺川先生は神戸大学大学院を修了後、現在はCASEまちづくり研究所を主宰されています。工学博士であります。専門は住民との協働によるまちづくりです。前回イギリスのお話をしてくださった佐藤先生が、都市の道路や緑、住宅の敷地といった都市の骨格を設計する都市プランナーであったのに対して、本日の寺川先生は、住宅供給の方針、地域通貨の仕組みを住民の人とつくり、あるいは住民と協働で在宅福祉サービスの仕組みをつくりという、まちづくりにおけるソフトの仕組みをつくることを得意とされている方です。若手の都市計画家のトップランナーとも言える方だと思います。

カンボジアとの関わりについて言えば、カンボジアを支援するNGOと連携して、地元に入って、現地の人が住宅やインフラを整備する取り組みの支援を実際にやってこられた方なので、今回はそのあたりのリアルな話が聞けるのではないかなと思います。

それでは寺川先生よろしくお願いします。

II 講演開会

寺川:みなさんこんにちは。CASEまちづくり研究所の寺川と申します。よろしくお願いします。今ご紹介いただきましたように、私はいま大阪でまちづくりの仕事させていただいておまして、最近よく聞きます住民参加型のまちづくり活動において、専門家の端くれとしてお手伝いさせていただいております。今日はカンボジアの話させていただくのですが、じつは大学院で研究をしていたころに、私の友人や先生方と一緒に、アジアの様々な地域のまちづくり組織のネットワークに関わらせていただくことがありまして、それがきっかけで、タイ、スリランカ、カンボジア、韓国などのいろんな国を巡る経験ができました。今日はそのなかのひとつであるカンボジアの話させていただきたいと思っております。

ちなみにカンボジアに行かれたことのある方は手を上げていただけますか?

……何人かおいでになりますね。

今日の報告でここがちがうよ、ということがありましたら是非言ってください (笑)。

では、カンボジアに行きたいなと考えておられる方はいますか？ これを見た後に行きたいと思っていただければと思います。ただ、少し皆さんがイメージされているものとは違うかもしれません。たとえばアンコールワットなどの歴史的な遺産が有名かと思います。いっぽうで負の遺産といいますか、地雷などの印象も強いのではないかと思います。では早速お話を始めます。

1. はじめに：本報告で伝えたいこと

住まい・まちづくりに関わる話として今回はお伝えできればと思っていることが三つほどあります。

一つ目は「カタストロフィーからの復興：ゼロからはじめるまちづくりのエネルギー」。災害や戦争などの大変な事態からの復興ということです。カンボジアの場合は特に悲惨なことが起こりましたので、それからまちを国民が作り上げていくというプロセスになります。

二つ目は「環境移行・居住継承とコミュニティ・ベースド・プロセスの意味」。

これは、もともとあった生活環境や関係性といったものをややもすると戦争や災害は断ち切っているところに移っていかなければならないことがよく起こります。そういうときには、やはりその関係性を担保し、維持しながらあたらしいところに移っていくということが非常に重要になってくるわけです。とくにここカンボジアでもいろんなことが起こってきます。そんなときに、地域やコミュニティが基本になったまちづくりのプロセスというものが非常に大事だと私は感じていますので、その一端でもみなさんにお伝えできればと思っています。

三つ目は「持続可能な開発とコミュニティ開発と専門家の立ち位置」。

最近開発の視点として、持続可能性ということがよく言われるようになりました。特に環境問題についてはアル・ゴアもかなりのエネルギーを掛けてやっていますが、やはり社会開発やまちづくり、都市化の問題も含めて、さまざまな意味で「続けることができる」ということをテーマにした活動が世界的に重要視されています。そのなかで、特に住まい・まちづくりにおいては、コミュニティ開発……これはまちづくりと読み替えてもいいかもしれませんが、その中に我々みたいな者が入るときに、どういう立場で入っていくべきなのかということについて、私自身が感じていることをお話ししたいと思います。

2. カンボジアの地勢

では、カンボジアのおおよその状態についてお話しします。今この国は立憲君主制です。現在の国王はノロドム・シハモニ国王 (2004年10月即位) です。有名な方でシハヌーク国

王という方がいらっしゃいましたが、2004年に退位されました。人口が1380万人。面積が18万平方キロメートル。人口に関していうと日本の10分の1というイメージですね。平均寿命が57.4才。特徴としては農業国であるということです。アンコールワットも有名ですね。地雷というイメージもあります。

せっかくですのでもう少し詳しく言っておきます。人種はクメール人が9割、あとはベトナムの方や華人がいます。仏教国です。クメール・ルージュの支配下で5分の1の方が亡くなりました。特に知識階層の方を虐殺していきました。

例えばここにあるように、487人いた医師が43人にまで減りました。学校の先生なども殺されたという歴史を持っています。今は平均寿命が57.4才。生まれてくるこどもも1,000人のうち183人が5才の誕生日を向える前に命を落としています。15才から45才までの人口のうち、HIV感染者の方が2.6%おられます。薬などが1時間以内に手に入る方は30%。片親、または両親を亡くした孤児が67万人います。5才から17才のこどものうち半数以上のこどもが働いています。

この写真はこどもがゴミを回収しているところですね。

25才の人口のうち54%は小学校を卒業していない。15歳以上の識字率は69.4%。7割近くは農業に従事しています。90%の人が薪で火をたいて生活しています。66%はきれいな水を飲める環境にありません。80%の人が明かりを灯油に頼っています。電車がありませんので、車やバイクが主な交通手段になります。電話線はないのですが、携帯電話がかなり使われるようになってきました。

あとは地雷ですね。不発弾で汚染された村が全国の村のうち半数を占めます。

1日2ドル以下で暮らす人びとの割合は77%。

というようなことを紹介されています。カンボジアという国のおおまかな状態というのはイメージしていただけたのではないかなと思います。これを受けてこれからお話していきたいと思います。

今日は特にプノンペン、カンボジアの首都について、そのなかのコミュニティのお話になります。人口が110万人くらいで、市域は280平方キロメートルくらいですね。市街地面積は28平方キロメートル。スラム人口は18万人。カンボジアの社会経済調査をみると、都市部と農村部では大きな差がでてきて、都心部では10%か15%（レジュームでは17%と書いていますが）、都市部でもそれだけのスラム人口があるということです。

そして農村部ではより高いということがわかります。都心部プノンペンの低所得者居住地域が570カ所あると言われています。

プノンペンの地図を見ていただきますと、意外と碁盤の目といいますか、かなり整備された都市のようにみえないでしょうか。

これはフランス領だったときに都市の骨格がつけられたわけです。特に左上のあたりは放射状にまちがつけられたということがわかると思います。

3. カンボジア・プノンペン事情

■ ポル・ポト政権までの歩み

ではちょっと歴史をみていきましょう。9世紀から13世紀というのはみなさんよくご存知のアンコールワット、アンコール時代です。インドシナを支配するくらい大きな勢力をもっていたこともありました。その後ベトナムとの関係で力を落としていき、1884年にフランス保護領カンボジア王国となり、フランスの影響下に入りました。ですから先ほど申しました都市の骨格も、フランスの都市づくりの影響を受けています。じつはいまでも行くとフランスの影響を受けているなと思うことがあります。まちなかを歩いていますとあちこちに屋台があって、何を売っているのかとのぞいてみますとフランスパンを売っているのですね。彼らは主食としてフランスパンを食べています。ここはどこだという感じがしますが、結構おいしいんですね。建物についても非常にデザインされたものが数多くありまして、その当時の建物がそのまま残っているというだけなんです。まち全体の雰囲気というと、フランスの影響を少しは垣間見ることができます。

1970年代には、ロン・ノル政権による政治的混乱があります。この頃からだんだん怪しくなっていくのですが、1975～1979年に、ポル・ポト政権が台頭して自国民を虐殺します。いわゆる原始共産主義といいますが、共産主義社会を構築していこうとする中で、カンボジア国民虐殺が始まっていくわけです。

1980年に入って、ポル・ポト政権は退陣を余儀なくされます。それから国を復興していかなければならないということで、国家復興計画を展開することになります。91年にはカンボジア和平パリ協定があって、92年には UNTAC（国際連合カンボジア暫定統治機構）の活動が開始します。このあたりのことはニュースで頻りに流れていましたので覚えておられるかとも思います。93年に王制が復活します。99年には ASEAN に加盟して、2004年にシハモニ国王が即位しました。

・・・というように、簡単な歴史を覚えておきましょう。特に押さえておかないといけないのは、ポル・ポトのことですね。クメール・ルージュとも呼ばれていますが、クメール共産主義による急速的な土地革命というのがはじまります。つまり、自分たちの土地はどんどん国家のものになっていくわけですね。そしてプノンペン現住民を農村へ強制移住させていきます。農村で労働させようということです。いわゆる都市行政システムがここで

崩壊してしまいます。土地に対する所有権や使用権もなくなります。

■再び人口は都市へ 「再定住計画」

その後、ポル・ポトがいなくなったあとに何が起こるかといいますと、土地建物を専有するという動きが出てきます。道路、河川、屋上などの公有地を占拠するという動きに繋がってきます。簡単に言うと、ポル・ポトによって強制移住させられた人たちが農村に移ったわけですが、それが終わって、再び都市に戻ってくるわけです。その時には自分たちの土地や建物がないわけですから、都市のなかで自分たちの居場所を確保する動きがでてきます。そういうことがあって、環境がどんどんと劣悪化していったわけですね。

それではいけないということで、UNTACなどが中心になって、91～92年に土地建物の使用許可登録制度というものを設定することになりました。これは結局、プノンペンの人口が110万人から0になっていたところに、また新しい人口がワッと流入してくる。そして、ある時期に「土地の権利を登録してください」ということをするわけですが、登録者数は都市の人口の半分くらいでした。それ以外の方は登録できていないという状態でした。仕事を奪われ、強制移住で働かせられて、都市に戻ってきても生活に困窮している低所得者層の人びとは、住環境も悪化していきました。

そこで、これからの国造りの一環として、住環境改善事業の中で一つの復興の形として提案され実践されるわけです。それがカンボジアの中では「再定住事業」という呼び方で計画が進められていくことになります。

これがクメール・ルージュ。左がポル・ポトです。今カンボジアに行くと、「トゥールスレーン」や「キーリングフィールド」といった場所があります。

「キーリングフィールド」という映画があります。これは実話を映画にしています。アメリカのジャーナリストとカンボジアのジャーナリストの話ですね。内戦のときにどのように生き延びていったか。また、その情報を国際的にどのように伝えていくべきなのか。そういう状況を映画のなかで非常にうまく伝えていると思います。本当にあったんだということが感じられます。小学校をクメール・ルージュが占拠して、そこで虐待していくわけですね。知識人を集めたり、反乱分子と見られたひとたちはそこで拷問を受けるわけです。小学校が拷問場所になっていたわけですね。それもいま残されていますし、そのなかでどのようなことが行われたかということも、博物館に展示してあります。

これは処刑をされる前に写真を撮って、それが壁一面に貼られていたものです。これは骸骨ですね。これは都市人口が0になったときのプノンペンの様子です。

クメール・ルージュの多くは子どもたちが兵士として中心を占めていたわけです。知識人は殺されていく。ある意味子どもたちが洗脳されていくわけです。そういうような社会

情勢のなかで、暗黒の時代というものがありません。

それを経て、UNTAC というものが、カンボジアの復興を進めていこうとするわけです。実は日本というのはカンボジアの復興にとって非常に重要な役割を果たしてきました。ODA というかたちで非常に大きなお金も落としたり、インフラ整備もしたりしました。ですから、カンボジアで日本人と言いますと、比較的によく思われているように感じました。

一方で、開発が上からのものになっている、地域に住んでいる人たちのことを考えない開発になっていると、かなり反対運動というものが出てきました。

その一例として、大きな橋をつくと、そこには ODA というかたちでお金が降りてくる。国はきれいになりインフラは整備されるかもしれないが、そこに住んでいた人たちは強制移住させられたりします。そういうようなことがいろんなところで起こります。そういう意味でいうと、大きなインフラ整備をはじめとした開発と、そこに住んでいる人たち（コミュニティや地域）との関係性が、非常に大きな課題になるということも、まますますあります。

■復興計画

今見ていただいているものは、カンボジアが新しい政府になって、これからどうやっていくのかという、復興の大きな基本計画です。特徴的なものとしては、この「四辺形戦略」、（その中心に据えた）「グッド・ガバナンス（良き統治）」ということで、政府自体がポル・ポトを反教師的に位置づけながら、新しい政府をつくっていくということで、「汚職対策」「法律司法改革」「行政改革」「武器回収と動員解除」ということをしながら、「政治的安定」「社会秩序」「地域世界の統合」「良好なマクロ経済」「金融環境」「開発のパートナーシップ」というようなものを位置づけていきながら、「農業部門」「インフラ整備」「能力開発」「民間セクターの開発・雇用促進」を戦略として、2025年までにここまでやるという数値目標も掲げて、いま進めています。

今回の報告書では、まだまだ難しい、到達していない、ということが書いてありますが、こういう流れのなかで進められているわけですね。

これは日本の ODA が実際にカンボジアのなかでやってきた様々なプロジェクトです。今日は詳しくは述べません。

これはプノンペンですね。プノンペンには日本人がつくった「絆橋（スピアン・キズナ）」などがあります。

■スラムの発生

それではコミュニティ、地域のことに入りたいと思います。先ほどいいましたように、農村から都市に一気に人口が集中するわけです。空いている土地、建物に人が住むようになります。そこで 1993 年、いわゆるポル・ポト政権が終わった後に、各地方から都市に貧困層が集まってくるなかで、バサック川のほとりに非常に多くの人が集まり、コミュニテ

ィ（ひとつの居住地）ができあがってしまいました。これはカンボジア最大のスラムと書かれていますが、それが今写真にありますように、湿地帯に家を建てて、家と家の間を自分達で木をつなぎながら道をつくっています。劣悪な居住環境だということで、いろんなNGOなどがサポートしたりするわけですね。いろんな犯罪や問題もこのなかで起こるようになります。一方で、生きていくための繋がりというのは、このようなコミュニティのなかでは自然発生的に生まれるわけです。いろんな問題を抱えながらも、生きるための生活というのが築かれてきた。それが地域というものを構成したということになります。

2001年に火災が起りまして、この地域は一度消失します。それを契機として政府は強制移住をさせようとしています。でもよく起こることなんですが、強制的にここは住めないの違うところに住みなさいといっても、かなり都市から離れたところに住まないといけないという計画になることが多い。しかし彼らは生活をするために都心に集まってきたわけですから、生活ができないということで、また都心に戻って来るといった状況が起こります。また、火事の後には高級建築物をつくってはいけないという制度ができましたので、藁葺き、廃材、ビニールシートなどによって、人びとはバラックをつくっていくことになりました。そして再スラム化するという状態が起こってしまうわけです。政府は幾度となくバサックスラムの強制撤去を試みるわけです。しかし、イタチごっこになる。こういう状況が続いていくわけです。じつは火災も自然発火ではなく放火ではないかと言われていたりもします。

4. プノンペンにおける低所得者層居住地域の住環境改善と再定住事業

これがバサックです。右が乾季で左が雨季です。こういうところにしか住めない人もいたということです。トイレがありません。こういうところに垂れ流しです。こういう状況を脱しないとイケないということで、1990年代に住環境を改善していくため再定住事業というものが始まります。

どのような事業かといいますと、オンサイト、オフサイトというプロジェクトがあります。

「オンサイトプロジェクト」とは、住環境整備をもともとあるコミュニティのなかで行う環境改善型の手法です。先ほどのようなところが各地にあるのですが、このようなコミュニティを同じ場所で改善するというものです。

「オフサイトプロジェクト」というのは、もともとある地域から新に居住地を探して最定住するという手法です。ですから全然違うまちに移っていくというやり方になりますね。再定住事業というのは、主にこのようなかたちで展開されてきました。

レジュメに「プノンペンにおけるリロケーションサイト一覧」とありますが、これは東洋大学大学院生の池谷啓介さんという方が調査されたものです。プノンペンの市内中心部

から 10 キロ圏内に黒い点々がありますね。リロケーションですから、もともと都市のスラムにおられた方がどこに移ったかというのが赤い点々で示されています。

この時点で 17 カ所で再定住のプロジェクトが起きました。定住率というものがありますよね。

これは結構おもしろいのですが、一番上の「Kop Sreou」というところが 13%の定住率。「Kork Kleang 1」 98%。

何を意味しているかということ、再定住後のコミュニティによっては、非常に定住するコミュニティと定住しないコミュニティがあるということがわかるわけです。

ではどういう違いがあるのでしょうか？

特にコミュニティ再定住プロジェクトの話をするために、今回は二つの事例をご紹介しますと思います。

「バンクロパー」と呼ばれているコミュニティと「トゥクラオク」と呼ばれているコミュニティが都心部にありました。紫のところですね。この人たちが移ったんですが、ちょうど 5 キロから 10 キロ圏内に移る再定住のプロジェクトになります。

まずバンクロパーコミュニティ再定住プロジェクトです。97 年にプノンペン市が、もともとあったスラム地区（道路を不法占拠していたコミュニティ）の再定住のために、土地を購入しました。その再定住の土地はプノンペン市内からだいたい 5 キロくらいの地域です。もともと湿地帯みたいなものですから、まずは再定住地の造成をします。ここまでは UNHCS、つまり国連がしました。井戸とトイレについては NGO が資金提供をするという約束でコミュニティを移しました。もともとその場所はいい場所ではないので、雨が降ると冠水するような土地です。せつかくまちを移っても、湿気で環境が悪くてはいけないので、高く造成したりしていったわけですね。

今までであれば、国や NGO が全てを用意して、そこに入りなさいといたり、何もしないで土地だけ渡してあとはほったらかし、ということもあったのですが、このバンクロパーというプロジェクトに関していうと、地域の人たちが自分たちで、新しく移るときにどういう問題が起こるのかということ議論しながら、就業の話やまちづくり（この中にはどういう道路を通そうか、トイレはどうしようかなども含まれています）を考えます。

つまり、今の生活、スラムという場所に住んできたことの何が問題だったのかということ考えながら、特に環境の問題というのを彼らは生活のなかで強く感じてきましたので、それを解決することが、新しいまちをつくる上で非常に大切ではないかとか、優先順位やその手法について、コミュニティ自体が数多くの議論をして、新しい定住地に向うということを進めていったわけです。

これが移住先の土地です。ここまでは国連が造成します。あとは自分たちでつくっていきなさいよ、というような手法なんですね。本当だったらここでほったらかしになること

が多いのですが、やはり元々あったスラムのコミュニティをここへ移すのにどんな手法があるのかということで、モデル的に、ここでは住民自身が自立的に問題を解決し、関わっていきながらまちをつくることの大切さを議論して、新しくできたまちに、インフラ、道路、下水、すべてについてワークショップをしながら決めていくということをしました。

162世帯が移転をしました。これは日本ではなかなか考えにくいのですが、日本の場合はできてから住みますよね。でもこの場合は住みながらつくるというやり方をして来ました。お金に関して、一定のインフラベースに対する国連などの支援はありますが、残りやはりローンを組まないといけないとか、家を買うときにもローンを組まないといけない、などということが出てくるわけですね。

仕事がないとローンは払えない。また、買うためのお金をどうやって貯めるか、というようなことも、地域の中で議論していくわけです。特にこの場合は「マイクロクレジット」を採用しました。最近ノーベル賞を受けられましたユヌスさんのグラミン・バンクというのがありますね。女性たちが日々お金を貯めて、それを仕事づくりに使ったり生活のために使ったりする。生活再建の一つの手法として、そういうコミュニティベースの銀行が注目されるようになってきましたが、ここでもデイリー・セイビングといって、毎日顔を合わせながらお金を貯める、そのなかでいろんな問題を話し合っていく、というような仕組みが考えられています。どのような住宅の敷地をつくろうかということも含めて議論していきます。コミュニティによる建設で住宅やインフラを整備していこうという方法ですね。

この写真は、さっき何もなかったところです。この場所の方法は、1階に住みながら2階をつくっていくという方法です。日本ではあり得ないのですが、あたり前のようにやっています。完成度の違いもいろいろあります。左側の人に聞くと、お金を貯めてもっといいものをつくるんだということを言っていました。様々で、こういった差もでてきたりしています。右側は伝統的なカンボジアの木造住宅をつくりたいということで作っています。

こういうように、個別に自分の家を計画しながら、隣の家との関係、例えば排水をどう通すかということも含めて議論していったわけです。

水の問題もあります。共同井戸は SEWA というところの支援によってつくります。

どうやって使っていくかという管理の問題も議論していきます。特に、いままで排水・汚水といった上下水の問題というのは非常に大きな生活上の問題になっていたの、新しいまちづくりのなかでは非常に重要視しなければならないということになるわけです。

ではどんな方法があるのかというのは、あちこちの専門家を読んだりしながら自分たちで計画して、お金がないから自分たちでつくる。

右上は自分たちでつくった排水溝です。「適性技術」と我々は読んでいるのですが、お金をかけていいものを組み込むだけではなくて、やはり自分たちが出来る範囲で、しかも性能もそこに担保しながら組み込んでいく、それを誰が管理するのかということも一緒に考

えていきながらつくっていく。こういう流れでこのまちができ上がっていくわけですね。

左上の写真のように、雨季になるとこれだけ水が溜まります。右側の写真は道路をつくるときに皆さんで議論をしまして、地区内通路、1階壁面は、あんまり密集していたら燃えた時にどうするんだ、環境もよくないんじゃないかということで、セットバックしています。日本でいえば地域計画、地区計画のようなものです。一番下は遠景です。

次のプロジェクトをみてみましょう。

「Kork Kleang 1 コミュニティ再定住プロジェクト」。この写真は空港からずっと来たところだと思いますが、プノンペンに入るところで、国立のこどもの病院がありました。その病院の周りの塀に、100世帯ほどの人たちがバラックを建てて占有していました。病院は環境整備をしようということで、周りの人たちに新しいところを用意するから移って欲しいという提案をしたわけです。その人たちはそのことがきっかけとなり結束して、病院と国連とワールド・ビジョンと、いろんな会議をしていながら、そこから資金提供を受けることになりました。

そのコミュニティのなかで、土地を買おうとあちこち探しに行きます。日本ではそのままのコミュニティが移るという発想はあまりなく、ひとりひとりがあちこちに住み替えるということが多いと思います。他方、このコミュニティの場合はまち全体が移ろうとするわけですね。土地探しからするわけです。日本で言うとコーポラティブのようなものが。

そこで資金を何とか確保してそれに見合った土地を探す。土地探しも結構大変なんです。自分の仕事に合わせて、仕事ができる距離で、環境もよくなるようなところということで、議論をしながらようやく土地を見つけることができました。それはだいたいプノンペンから5キロくらいの場所で、住民全員が合意して移ったわけです。ここも元々あるコミュニティというもののなかで、まちづくりを進めてきた事例の一つだと言えますね。

上の写真が病院の配置図です。これが病院です。まわりにズラーとこういう家が建っていました。結構差はありますが、都心で儲けた人はちょっとずつ立派になってきたりしていますね。この左側の家はリーダー（おばさんというかお母さん）の家で、だいたいこの場所が集会所になって議論しています。これは皆が集まっているところです。だいたい、水や湿気が出てくることへの対策として、カンボジアの住宅は高床式というものがありまして、そういう住宅をつくっているところも多いですね。ここを店にしている方々もおられます。

これは貯蓄活動、コミュニティバンクのリーダーですね。

これは駄菓子屋さんや雑貨屋さんのリーダーです。これはまだ若いときの写真ですが。

特にこれは URC という現地の NGO です。住環境改善をするための NGO があったのですが、学生たちと一緒にまちに入ってヒアリングをしていくわけですね。そのヒアリングをもとにして、従前の家や生活をプロットするなどして、新しい家ではどうしているのか、いま何に困っているのかを聞き取っている風景です。

そういう意味で言うと新しいまちをつくるという意味で、この二つの事例はどちらかというと（他に 17 コありますが）、非常に上手く行ったコミュニティ・コンストラクト、つまりまちづくりの事例だと言われています。その中で、プロセスを非常に大事にしてきたということが（特徴として）上げられるのかなと思いますが、当然今見ていただいたように、移住する前に、全住民を対象とした実態調査をしています。チェックシートをもちながら、「今の生活はどうだ」「だいたいどのくらいの家で何人が生活しているのか」というようなことも、住民自身が参加しながら調査しているわけですね。

それに専門家が入っている。地域の学生も入るし、我々みたいなものもサポーターとして入るわけです。

ここは URC といって、今はないのですが、現地の NGO が中心になってこういうことをしています。

再定住プランニングワークショップ。移住までの計画のあいだに、様々なワークショップを積み重ねていきます。あちこちでワークショップができていきます。日本みたいに場所を用意しないとワークショップができないということではなくて、空間があればワークショップをします。紙を広げてワーツと書いて皆で話して、ということ積み重ねていくわけですね。

このような形で道端に座りながらでも自分のまちについて皆で意見を聞かせます。こんなんしょう、あんなんしょうといって議論をしていっているわけですね。

このプロセスを経て住民による意思を決定していく、繋がり密度を高くしていくということになります。先ほどの銀行の話もそうですが、よほどの関係がないかぎり、お金を扱うというところまでいかないことが多いと思います。そういう意味でいうと、昔の日本で言う「たのもし」みたいなものですが、そういう関係を徐々に深めていくひとつの仕組みとしてコミュニティでのまちづくりの特徴があります。

いよいよ個別のプランニングですが、たとえば左側は「昔の家と同じものをつくりたい」、高床式がいい」という人の家ですね。この当時カンボジアで流行っていたのはタイルでしたが「タイルでピカピカにするのがいいわ」という人などいろいろいるわけですが、生活を聞きながら新しい住まいのデザインを一緒になってつくっていく。

必要となる費用や移住手段の計画なども含めて、生活の設計とプランの設計とまちの設

計というものを同時並行的につくっていく。そしてようやくディテールを計画する。こういうときに専門家（ここではURCというところ）が入って、具体的にできたものを計画的に落としていく作業がそのなかに加わっていくわけです。

これが先ほどみていただいたバンクローパーの2年後、「Kork Kleang 1」の地区ですね。今左下（の写真）はつくっているところですね。当然皆さんここに住んでいますが、ここで生活しながら、2階は後からつくるねん、という方が多いです。こういうかたちでまちが徐々にできあがっていきます。

次に衛生関係のインフラ整備にしても、もともとあったスラムの衛生環境というものについてはみなさんでかなり議論してきました。その甲斐もあっていろんな手法をもちいて、費用も掛けない、効果も高いというようなものを自分たちでつくろうとしています。まちの構造についても、自分たちでつくっていったわけですから、何がどうなっているのかよく分かっている。ですから、その後のメンテナンスも非常に早い。

与えられたものではなくて、自分たちで作りあげていくことの利点をよくしているので、インフラ整備もしています。

このように参画型といいますか、コミュニティが抱えている問題を共有しながら、ワークショップなどを通じて、自分たちの問題をどう解決していくのかということをお互いが議論していく。その中に専門家や様々なメンバーが参画していく。こういう方式で、カンボジアでは進んできたわけです。

その後政府は、この方法はどうもうまくいくらしいと考えて、同じような手法を用いていこうとします。しかし同時に再定住ということは、言い換えれば別のところに住民を移したいわけですね。スラムをなんとかしたいという力がかなり強く働いていきます。ワークショップなどを通じて住民や専門家が話し合いを重ねながら計画をつくっていくというプロセスを抜いて、単に住民を移していくという流れができていってしまいます。

ちょうど今紹介した、病院の横にあったコミュニティの再定住地の「Kork Kleang 1」がありますね。どうもここが上手くいったということで、政府がこの土地の隣接地で同じような再定住プロジェクトを展開しました。表面上には同じような手法なんですけど、国連が土地をある一定のところまで整備し、何のコミュニティの取り組みもないままに住民を集めて、「あとは住民さんじゃあがんばってね。あなた方がやらないといけませんよ」とある意味ほったらかしにされてしまったわけです。

当初、「コックレアン 1」の経験を活かして新しいものができたらしいということで僕らも見に行きました。でも、どうも違う。やっぱりコミュニティでの作りあげていくプロセスを歩んでいないので、まちや環境の作り方、構造、コミュニティの関係などが希薄ではないかと感じました。

住民にヒアリングをしても、自分たちは何もしないで不平不満ばかり言ってるんですね。また、ヒアリングをしている最中に黒塗りの車がやってきて、「お前は何ものや日本から何しに来たんや」と、とある政府関係者の人たちにかこまれて、あまりかぎ回るなど言われたりするわけですね。

先ほどの四辺形戦略というものがありました。まだまだ汚職なども多くて、こういう大きな開発では大きなお金が動きますので、それを使って議員などの力を持った人がお金だけを自分のものにしながら、後はほったらかしというようなことが起こってきたりもするわけです。

治安はよくなってきたとは言えるものの、いつでもピストルを打てるような状態ですので、我々も「いい町ですね〜」と言いながら去っていくことしかできないのですが、やはりこの二つの地域の違いを目の当たりにすると、そのプロセスの持っている大切さというのを非常に強く感じる事ができたと思います。

その他、今みていただいている地域は比較的都心に近い立地にありますが、他の地域はかなり遠いことがわかりますよね。遠くなるということは、先ほども言いましたが、生活をするための、つまり仕事をするための糧がないなかでまちが移るわけです。大きなコミュニティになると、そこにマーケットができたり小学校をつくったり、なんとか完結させようということで整備をするわけですが、なかなかそれでもうまく定着しないんですね。やはり受け入れてしまわざるを得ないという状態のなかでは、いくらいろんなものを整備したり用意したりしても、なかなか上手く機能しない、まわっていかない、ということが、ほんとうにこのカンボジアのなかではよく起こっているなと思います。

遠いなりに、自分たちは頑張らないといけないということを強く意識しながらコミュニティづくりをしているところもみられます。そういう意味では一概に距離だけではないかもしれません。しかし、まちは総体として成り立っている、生活のなかにはコミュニティや就労もあり、これは住環境とセットになっています。また、計画についても往々にして、建築計画や都市計画などハード中心に計画をしていくことがよくあります。しかし、やはり教育・商業・雇用・文化・福祉などを十分に考慮して盛り込んでいかないといけないということ、その大切さをカンボジアの経験のなかで強く感じる事ができました。

最後に、このような状況の中で、どうかたちで我々専門家が参加していくべきなのか、ということについてお話しします。

実は、今回は、あえて外国人としてカンボジアのまちづくりに参加するという立場で入りました。地域のまちづくり活動には、現地の居住者、地域の関係者（例えばさっきの例でいうと移転を望んでいる病院の人、行政の人など）などさまざまな主体がそこに関わっています。その他にも、外部の人としては学生、NPO、NGOなどが入って、コミュニティ

活動を支援しています。その中で、客観的な第3者として我々がサポートするというような関係で参画しました。

お聞きになればわかるとおり、このようなアジアの開発では、極めて多様な主体が関わっています。主体ばかりが多いとややもすれば「船頭多くして船、山へ上る」と言われるように、地域やまちが思っていることとは全然違うところに船が乗り上げてしまうことが起こります。

お互いの思いが違う場合には軋轢（あつれき）が生じたりします。そういうときには、やはり何のためにやっているのか、そのなかで専門家はどのような立場で入るのかということなどを常に考えながらやるべきだと感じています。

また、特に先進諸国から行く専門家に対する現地の専門家や住民リーダーからたまに聞く言葉があります。彼らは、『君たちはなにも知らないので教えてあげよう』という上からの目線で来る専門家が多いが、自分たちは先進国の取り組みもよく勉強しているし、この国にあった独自のやり方も考えているので、それを配慮した関わり方も考えて欲しいと思うことがある。』といます。

このような中で、特にこのカンボジアの事例をつうじて感じたことは、参加型まちづくりにおいて、コミュニティ主体の「エンパワーメント」や「ファシリテート」に対する支援が重要だということです。とくに専門家の役割については、専門家が主体となって住民の意思とは別に取り組みを進めたり、問題が起こらないように先だって専門家が動いたりするような支援ではなくて、少しずつ、地域の人たちが動く内容に合わせて、一緒に学び考えながら、地域の人々が試行錯誤を体感するような支援を繋げていくということが非常に重要ではないかと感じました。

■ブロックダンパーコミュニティの様子 <動画> 一部

最後に、私たちが調査したフランス統治下に建設された共同住宅の屋上に内戦後形成されたまち「ブロックダンパーコミュニティ」の映像を見て頂いて今回の報告を終えたいと思います。

ある種屋上の占拠によって出来た「まち」の姿をみると、生活感が溢れる住民の強さと下町的な豊かさが映し出されています。コミュニティでは、住戸権利の整理、相互扶助の仕組みや防災対策の充実に向けた議論が進みつつある中で自治組織の充実が図られつつあり、調査後のヒアリングでは、火災など緊急時の対応について議論しました。

帰国して数ヶ月後、残念なことにこの町は火災によって焼失したことを知って愕然としました。専門家としてもっと出来ることはなかったのだろうかと自問自答した瞬間でした。

時間をかけながらコミュニティの主体性を高める活動を進めながらも、防災や環境など緊急性の高い課題に対する専門家の役割の重要性も強く感じました。

私は、専門家としてまちに入るときには、あくまでいなくなることを前提に何が出来るか、ということを重要視しながら入ることにしています。

つまり、有能な専門家があるまちに入って、そのまちをきれいに仕上げていく、そのまちをつくり直してあげるというスタンスではなく、専門家がなくなった後には誰がまちをつくりあげていくのか、何か問題が起こったときに誰が解決するのかという視点が重要であり、持続可能なまちづくりや開発の仕方というのはどういうことかということを考えて入っていくことが大変重要であると考えています。

私の場合はアジアのこういった経験で学び、現在も常々悩みながら仕事を進めているところです。今回のまちづくりの報告を通じて、プロセスを大事にした計画づくりに関わる専門家の役割を考えるひとつのきっかけにして頂ければと思います。

—以上—